

# 「常用漢字表」の一字下げの音訓について

中 川 秀 太

## 1. はじめに

「常用漢字表」(2010)の「表の見方及び使い方」の7に漢字の音訓についての説明があり、「一字下げの音訓」は次のように記される。

- (1) 一字下げで示した音訓は、特別なものか、又は用法の狭いものである。なお、一字下げで示した音訓のうち、備考欄に都道府県欄を注記したものは、原則として、当該の都道府県名にのみ用いる音訓であることを示す。

漢字表の「本表」から例を示すと、「雨」には音(おん)の「ウ」と訓の「あめ」が同等に示され、「雨雲」「雨戸」などに使われる「あま」が一字下げの音訓として示される。「栃」は「とち」という訓のみが漢字表に含まれ一字下げで載る。その用途は備考欄にある「栃木県」の表記を行うことにある(本稿では漢字の音はカタカナ、訓はひらがなとし(連濁などが生じた場合も含む)、単語ごとの語形を示す際は、ひらがなに統一する)。

以上を前提として本稿で検討するのは、「特殊」「用法の狭い」音訓を含む熟語は、語として一般的に理解されているかどうか、知らない語であることが一因となり誤読、類推読みが発生してはいないかどうかといったことである。さらに、国から出される戦後の漢字表において、これらの音訓がどのように扱われてきたのかという歴史をも検討し、いかなる事実があったのかを探る。

この問題を考えるにあたり、筆者は2020年に都留文科大学で質問紙調査を行い、70人分の回答結果を得た。「雨具」「胸毛」など一字下げの音訓を用いた語例(連語も含む)の計208語を提示し、その語形(読み方)を記

述させる方式であるため、語によっては、さまざまな語形が記された（「都道府県名を表記するために掲げた音訓」として前書きに挙がる「茨」「岡」「埼」「栃」「阜」は対象外）。語形がわからず無回答という場合もある。以下では、この結果をもとにして、扱いに注意の要る語の特定を試みる。なお一部の語については、2020 年段階では調査対象から外しているが、一字下げで示される語全体の状況を把握するために、2022 年に改めて 140 人に対する調査を行った。詳細は 2.2 に記す。

以上の語に関するマスメディアの処置を参考にするため『NHK 漢字表記辞典』（以下『NHK 漢字』）、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（『NHK アクセント』）、共同通信社の『記者ハンドブック 第 14 版』（『共同』）、『読売新聞 用字用語の手引 第 6 版』（『読売』）などを用いることがある。学校教科書についても東京書籍の『教科書 表記の基準 2021 年版』（非売品。以下『教科書』。本稿では同社の許可を得て使用）を用いて表記情報の参考とする。

## 2. 大学生に対する調査の結果

### 2.1 一字下げの音訓をどう読むか

以下の表 1 に回答結果を示す。全員が正答のものから順にグループ分けして掲げるが、分類は便宜上のものである。一字下げとして一括される語が語形の難度に関して均一ではないことが示せば本稿の目的にはかなう。

表の見方を「**雨具**<sup>B</sup>」「**断食**<sup>A</sup>（だんしょく<sup>7</sup>）」を例に説明する。「雨具」は全員が正答した語であり、B とあるのは、一字下げの「あま」の読みが 1973 年の「当用漢字音訓表（改定）」で示されたことを示す。下線は、その部分の音訓が問題部分であることを表す。「断食」は 60 人から 69 人の正答者がいた語であり、A は 1948 年の「当用漢字音訓表」から「ジキ」の読みが載ることを表す。それぞれの漢字表の略記号は（2）に掲げる。

（2）A：当用漢字音訓表（1948）※同表では特殊な音訓は傍線つきで示された。

B：当用漢字音訓表（改定）（1973）

C：常用漢字表（1981）

D：常用漢字表（改定）（2010）

「留守」のように前後の音がいずれも一字下げの場合もあり，その場合は語全体に下線がつく。「(だんしょく<sup>7</sup>)」は「だんしょく」と読む誤りが7件あったという意味である。漢字表は（2）のA～Dの記号を用いる。「断食」の太字は，この語に関し『日本国語大辞典 第2版』に仏語・神仏に関する意味が記載されることを意味する。太字を施した理由は3に記す。「一年中」は漢字表では「〇〇中」という示し方であるが，調査対象者にわかりやすいよう「一年中」と示した。また，「旬」は「旬」「旬の野菜」の例が漢字表にあるが，調査用には一つで間に合うため，「旬(の野菜)」と提示した。「宮(く)」は漢字表の備考に「宮内庁」などと使う」とあるので，「宮内庁」を用いた。なお「兄弟」は漢字表に「ケイテイ」と読むこともある」とあるが，調査結果に「けいてい」はなかった。「キョウ」も「ケイ」も「当用漢字音訓表」から載る音訓であり，すでに当時から「きょうだい」のみで事足りていたことが推測される（一部の人が「けいてい」と読んでいたことを否定するものではない）。したがって2.2で扱う語（トモ書きの語）とは別扱いとする。

表1 語形調査の結果

正答数	語例
70	雨具 <sup>B</sup> 天下り <sup>B</sup> 一年虫 <sup>D</sup> 稲穂 <sup>B</sup> 上着 <sup>B</sup> 上積み <sup>B</sup> 金具 <sup>B</sup> 金縛り <sup>B</sup> 彼女 <sup>A</sup> 牛柱 <sup>D</sup> 工夫 <sup>B</sup> 財布 <sup>B</sup> 酒屋 <sup>B</sup> 再来月 <sup>B</sup> 再来週 <sup>B</sup> 再来年 <sup>B</sup> 修行 <sup>A</sup> 包 <sup>D</sup> [の野菜] 信仰 <sup>A</sup> 掃除 <sup>B</sup> 大豆 <sup>A</sup> 弟子 <sup>B</sup> 納豆 <sup>B</sup> 納得 <sup>B</sup> 坊主 <sup>A</sup> 坊ちゃん <sup>B</sup> 布団 <sup>B</sup> 胸毛 <sup>B</sup> 胸騒ぎ <sup>B</sup> 群がる <sup>B</sup> 兄弟 <sup>A</sup> 遺言 <sup>A</sup> 留守 <sup>A</sup>
60～69	雨雲 <sup>B</sup> 雨戸 <sup>B</sup> 天の川 <sup>B</sup> (あまのかわ <sup>4</sup> ) 一切 <sup>A</sup> 稲作 <sup>B</sup> 絵馬 <sup>B</sup> お節料理 <sup>B</sup> 音頭 <sup>B</sup> 開眼 <sup>B</sup> 街道 <sup>B</sup> 金物 <sup>B</sup> 機嫌 <sup>C</sup> 句読点 <sup>B</sup> (くどくてん <sup>7</sup> ) 供養 <sup>A</sup> (きょうよう <sup>4</sup> ) 境内 <sup>A</sup> 夏至 <sup>B</sup> 懇念 <sup>A</sup> (けんねん <sup>9</sup> ) 仮病 <sup>A</sup> 神久しい <sup>B</sup> (かみがみしい <sup>4</sup> ) 格子 <sup>B</sup> 本除 <sup>B</sup> 献立 <sup>B</sup> 最期 <sup>B</sup> (さいき <sup>6</sup> ) 酒盛り <sup>B</sup> 早速 <sup>B</sup> 磁石 <sup>A</sup> 支度 <sup>B</sup> 精進 <sup>A</sup> (せいしん <sup>4</sup> ) 小児科 <sup>A</sup> 成仏 <sup>A</sup> 静脈 <sup>A</sup> (せいみやく <sup>7</sup> ) 白ける <sup>B</sup> 真紅 <sup>A</sup> 断食 <sup>A</sup> (だんしょく <sup>7</sup> ) 天柱 <sup>A</sup> 天柱 <sup>D</sup> 土壇場 <sup>B</sup> 長唄 <sup>D</sup> 南無 <sup>B</sup> (なんむ <sup>5</sup> ) 何十 <sup>B</sup> 何点 <sup>B</sup> 年貢 <sup>B</sup> 暴露 <sup>B</sup> 法度 <sup>B</sup> 繁盛 <sup>A</sup> (はんせい <sup>4</sup> ) 披露 <sup>C</sup> 去婦 <sup>B</sup> 風情 <sup>D</sup> (ふうじょう <sup>7</sup> ) 舟遊び <sup>B</sup> 船旅 <sup>B</sup> 煩悩 <sup>B</sup> 目の当たり <sup>B</sup> 眉間 <sup>D</sup> 明星 <sup>A</sup> (めいせい <sup>7</sup> ) 胸板 <sup>B</sup> 疫病神 <sup>A</sup> (えきびょうがみ <sup>5</sup> ) 由緒 <sup>B</sup> 律儀 <sup>B</sup> (りつぎ <sup>4</sup> ) 流転 <sup>A</sup> (りゅうてん <sup>5</sup> ) 流布 <sup>A</sup> (りゅうふ <sup>5</sup> )
50～59	小唄 <sup>D</sup> 風上 <sup>C</sup> (ふうじょう <sup>7</sup> ) 風車 <sup>C</sup> [訓読み] 神主 <sup>B</sup> (しんしゅ <sup>6</sup> ) 脚立 <sup>B</sup> (きゃくりつ <sup>7</sup> ) 宮内庁 <sup>A</sup> 群査 <sup>A</sup> (ぐんせい <sup>5</sup> ) この間に及んで <sup>A</sup> (き <sup>9</sup> ) 御利益 <sup>B</sup> (ごりえき <sup>15</sup> ) 声色 <sup>B</sup> (ねいろ <sup>6</sup> ) 今昔 <sup>A</sup> 成就 <sup>A</sup> 深紅 <sup>A</sup> 歳暮 <sup>A</sup> (さいぼ <sup>6</sup> ) 摂政 <sup>A</sup> (せつせい <sup>9</sup> ) 莊嚴 <sup>A</sup> (そうげん <sup>10</sup> ) 内裏 <sup>A</sup> (ないり <sup>8</sup> ) 手綱 <sup>B</sup> (てづな <sup>6</sup> ) 瓜先 <sup>D</sup> (つめさき <sup>11</sup> ) 瓜弾 <sup>D</sup> (つめはじく <sup>5</sup> ・つまはじく <sup>7</sup> ) 通夜 <sup>B</sup> 納屋 <sup>A</sup> (のうや <sup>16</sup> ) 何本 <sup>B</sup> 女房 <sup>B</sup> 凡例 <sup>B</sup> (ぼんれい <sup>14</sup> ) 拍子 <sup>A</sup> (はくし <sup>5</sup> ) 舟歌 <sup>B</sup> 舟宿 <sup>B</sup> 未曽有 <sup>D</sup> 六日 <sup>B</sup> 八日 <sup>B</sup> 流罪 <sup>A</sup> (りゅうざい <sup>8</sup> )
40～49	愛想 <sup>B</sup> 行脚 <sup>A</sup> (ぎょうきゃく <sup>12</sup> ) 和尚 <sup>C</sup> (わしやう <sup>10</sup> ) 帰依 <sup>A</sup> (きい <sup>17</sup> ) 供物 <sup>A</sup> 石高 <sup>A</sup> 木立 <sup>B</sup> 権化 <sup>A</sup> 参内 <sup>A</sup> (さんない <sup>18</sup> ) 白む <sup>B</sup> 糞生 <sup>B</sup> (さっしょう <sup>21</sup> ) 象牙 <sup>D</sup> 読点 <sup>B</sup> (どくてん <sup>13</sup> ) 仁王 <sup>B</sup>

30～39	合戦 <sup>B</sup> (がっせん <sup>40</sup> ) 給仕 <sup>B</sup> (きゅうし <sup>34</sup> ) 久遠 <sup>A</sup> (きゅうえん <sup>7</sup> ) 権現 <sup>A</sup> (けんげん <sup>36</sup> ) 紺青 <sup>A</sup> (こんせい <sup>7</sup> ) 建立 <sup>B</sup> (けんりつ <sup>26</sup> ) 出納 <sup>A</sup> (しゅつのおう <sup>21</sup> ) 白壁 <sup>B</sup> [訓読み] 神道 <sup>B</sup> (しんどう <sup>28</sup> ) 相殺 <sup>A</sup> (そうざつ <sup>20</sup> ) 手繰る <sup>B</sup> (てさぐる <sup>16</sup> ) 反物 <sup>A</sup> (はんぶつ <sup>15</sup> ・はんもの <sup>9</sup> ) 中風 <sup>B</sup> (なかかぜ <sup>15</sup> ) 歩 <sup>B</sup> [将棋](ほ <sup>22</sup> ) 奎行 <sup>B</sup> (ほうこう <sup>24</sup> ・ほうぎょう <sup>6</sup> ) 不積 <sup>A</sup> (ふせい <sup>6</sup> ・ぶじょう <sup>7</sup> ) 船賃 <sup>B</sup> (せんちん <sup>17</sup> ) 火影 <sup>B</sup> (ひかげ <sup>13</sup> ・ひえい <sup>6</sup> ) 馬子 <sup>B</sup> (ばし <sup>6</sup> ) 且深 <sup>B</sup> 謀反 <sup>B</sup> (ぼうはん <sup>11</sup> ・もはん <sup>7</sup> ) 亡者 <sup>B</sup> (ぼうしや <sup>14</sup> ・ぼうじゃ <sup>11</sup> )
20～29	鹿の子 <sup>D</sup> 功德 <sup>A</sup> (こうとく <sup>35</sup> ) 懸想 <sup>A</sup> (けんそう <sup>31</sup> ) 言質 <sup>B</sup> (げんしつ <sup>14</sup> ) 虚空 <sup>A</sup> (きよくう <sup>33</sup> ) 黄金 <sup>B</sup> [訓読み] 勤行 <sup>B</sup> (きんこう <sup>27</sup> ・きんぎょう <sup>11</sup> ) 疾疢 <sup>B</sup> (えきびよう <sup>19</sup> ・しつびよう <sup>13</sup> ) 祝儀 <sup>B</sup> (しゅぎ <sup>37</sup> ) 千石船 <sup>A</sup> (せんごくせん <sup>10</sup> ) 納戸 <sup>B</sup> (のうど <sup>14</sup> ・のうと <sup>7</sup> ) 遊説 <sup>A</sup> (ゆうぜつ <sup>16</sup> ・ゆうせつ <sup>13</sup> ) 靈驗 <sup>B</sup>
10～19	唯々諾々 <sup>B</sup> (ゆいゆい <sup>15</sup> ・ゆうゆう <sup>6</sup> ) 一献 <sup>A</sup> (いつけん <sup>39</sup> ) 香車 <sup>B</sup> (こうしや <sup>25</sup> ・かしや <sup>17</sup> ) 験がある <sup>B</sup> (けん <sup>11</sup> ・しるし <sup>9</sup> ) 好事家 <sup>B</sup> (こうじか <sup>28</sup> ) 早急 <sup>B</sup> 祝言 <sup>B</sup> (しゅくげん <sup>19</sup> ・しゅくごん <sup>14</sup> ) 衆生 <sup>A</sup> (しゅうせい <sup>27</sup> ) 上人 <sup>B</sup> [仏教語](じょうにん <sup>22</sup> ・うわびと <sup>10</sup> ) 苗代 <sup>B</sup> 兵糧 <sup>B</sup> (ひょうりょう <sup>14</sup> ・へいりょう <sup>10</sup> ) 普 誼 <sup>B</sup> (ふせい <sup>29</sup> ) 酢すめ <sup>B</sup> 酢千鳥 <sup>B</sup>
0～9	行火 <sup>A</sup> (ぎょうか <sup>13</sup> ・ぎょうび <sup>11</sup> ) 衣鉢 <sup>C</sup> 回向 <sup>A</sup> (かいこう <sup>56</sup> ) 庫裏 <sup>B</sup> (こり <sup>27</sup> ) 香壺 <sup>B</sup> (こうか <sup>39</sup> ) 虚無僧 <sup>A</sup> (きよむそう <sup>46</sup> ・きよむぞう <sup>8</sup> ) 散華 <sup>B</sup> (さんか <sup>44</sup> ) 赤銅 <sup>A</sup> (せきどう <sup>56</sup> ) 從三位 <sup>B</sup> (じゅうさんみ <sup>16</sup> ) 從容 <sup>B</sup> (じゅうよう <sup>32</sup> ・じゅうよう <sup>10</sup> ) 心神耗弱 <sup>B</sup> (しんしんもうじゃく <sup>36</sup> ) 寂として <sup>B</sup> (じゃく <sup>18</sup> ・しゅく <sup>10</sup> ) 大音声 <sup>B</sup> (だいおんせい <sup>49</sup> ) 博徒 <sup>B</sup> (はくと <sup>46</sup> ) 博勞 <sup>B</sup> (はくろう <sup>49</sup> ) 榎木 <sup>C</sup> (えんぼく <sup>22</sup> ) 遼山 <sup>B</sup> (りゅうざん <sup>45</sup> ) 緑青 <sup>A</sup> (りよくせい <sup>20</sup> ・りよくじょう <sup>12</sup> ・りよくしゅう <sup>6</sup> ) 六根渣淨 <sup>B</sup> (ろくこんせいじょう <sup>38</sup> ・りっこんせいじょう <sup>6</sup> )

※表中の〔 〕内の文言は調査時の注意書きである。

以下の語形は、別語形として歴史的に存在したもの、あるいは現在のものとして国語辞典に掲載されることのあるものであり、誤読の例としては表に示さなかった。

- (3) 開眼(かいがん<sup>60</sup>) 白壁(しろかべ<sup>11</sup>) 通夜(つうや<sup>13</sup>) 苗代(なえしろ<sup>20</sup>) 女房(にようぼ<sup>15</sup>) 馬子(うまこ<sup>12</sup>) 靈驗(れいけん<sup>28</sup>)

## 2.2 備考欄のトモ書きの語について

漢字表の備考欄には、一字下げの音訓「なの」を用いた「七日」に対し、「七日」は「なぬか」とも」というように、トモ書き(ともがき、複数の語形があることを示す方法)で熟語の語形が示されることがある。どちらも現代語として誤りではないという意味である。2020年の段階では、誤読を主な調査テーマとしたかったこともあり、複数の語形が存在する語は調査対象から外したものの、本稿を書くにあたり、現在の大学生がどちらの語形を選びやすいのかを押さえておきたいと考え直し、都留文科大と大正大学で改めて2022年に調査を行った。男女170人から回答を得た(男20人・女150人)。質問形式は、「七日」を例にすると、「なのか」なら①、「なぬか」なら②、両方なら③、そのほかなら④とし、④の場合は、具体的な語形を記述させる

形をとった。以下に表 2 としてまとめる。左の語形は漢字表が一字下げの音訓の語例として掲げるものである。

表 2 トモ書きの語の読み

遺言	ゆいごん <sup>151</sup>	いごん <sup>2</sup>	両方 <sup>17</sup>
七日	なのか <sup>162</sup>	なぬか <sup>0</sup>	両方 <sup>8</sup>
老若	ろうにやく <sup>150</sup>	ろうじゃく <sup>2</sup>	両方 <sup>18</sup>
寂然	せきぜん <sup>67</sup>	じゃくねん <sup>79</sup>	両方 <sup>11</sup>
法主	ほつす <sup>32</sup>	ほうしゅ <sup>125</sup>	ほっしゅ <sup>0</sup>
情緒	じょうちょ <sup>162</sup>	じょうしょ <sup>3</sup>	両方 <sup>5</sup>
身上	しんしょう <sup>6</sup>	しんじょう <sup>114</sup>	両方 <sup>11</sup>
人数	にんず <sup>0</sup>	にんずう <sup>168</sup>	両方 <sup>2</sup>
寄贈	きそう <sup>0</sup>	きぞう <sup>164</sup>	両方 <sup>6</sup>
愛着	あいじゃく <sup>0</sup>	あいちゃく <sup>170</sup>	両方 <sup>0</sup>
執着	しゅうじゃく <sup>3</sup>	しゅうちゃく <sup>164</sup>	両方 <sup>3</sup>
面且	めんぼく <sup>86</sup>	めんもく <sup>28</sup>	両方 <sup>56</sup>
富貴	ふうき <sup>127</sup>	ふっき <sup>19</sup>	両方 <sup>11</sup>
問屋	とんや <sup>134</sup>	といや <sup>4</sup>	両方 <sup>32</sup>

「身上」のみはトモ書きではなく「「身上」は、「シンショウ」と「シンジョウ」とで、意味が違う」という注記である。この語の回答結果が 170 にならないのは、「みのうえ」の回答が 39 件あったからである。これは「しんしょう」のみならず、「しんじょう」も「とりえ」や「長所」といった類義語に置き換わっている人がいることを示す傍証かもしれない。「みのうえ」は「身の上」が現代語の標準的な表記である<sup>1)</sup>。「しんしょう・しんじょう」が日常語と意識されているならば、「身上」という表記から「みのうえ」を導くという判断にはなりにくいはずである。「しんしょう」については言語学者の大石初太郎 (1911～2003) が「財産のことを「しんしょう」と言うのも、いまや古めかしい。若い人たちのことばではない」(「朝日新聞」1968 年 8 月 7 日) と述べていた。

「寂然」も「しゃくぜん<sup>5)</sup>」「じゃくぜん<sup>4)</sup>」などの誤読があるため、合計が 170 にならない。「富貴」の「ふき<sup>13)</sup>」も同様であるが、この場合「ふき」が古くは存在していたので、その語形を意識して回答されたのか、文字のとりの発音を行った結果なのかは不明である。

表2に掲げた調査結果を見て疑問に感じることは、漢字表に示されている左側の語形が大学生への調査では常に優勢とはならないことである。漢字表が優先的に掲げる語形が一般的・標準的であり、トモ書きで示される語形は非一般的・非標準的なものであるのが整ったあり方である。統一的ではない理由を3.1で検討する。

### 3. 戦後の漢字表の歴史といくつかの疑問

先に二つの表で示した結果をもとに、ここでは以下の三つの疑問について検討する。

- (4) 1 語形：トモ書き語形＝非一般的な語形とならない理由は何か。
- 2 音訓：なぜ「特別なもの又は用法のごく狭いもの」と一括される音訓の種類が雑多に見えるのか。
- 3 語彙：神仏関連、特に仏教語が多いことに何か意味があるのか。

2について「雨雲」と「行火」を例にして補足する。前者は「あめ→あま」という語中の母音変化として扱えるのに対し、後者は「コウ」(漢音)と「ギョウ」(呉音)という一般的な音に対して「アン」(唐音)という漢字音の中で非一般的な唐音の例が示されている。前者は、原則としてこのような音の変化があることを「表の見方及び使い方」で説明すれば事足りるのではないか。連濁については、「表の見方及び使い方」には例示がないものの、「隣国(りんごく)」における「ゴク」は表内音として処理されている。一方、後者の「アン」は「コウ」「ギョウ」からの音変化としては説明しにくく、特殊なものとして掲げるのがもっともな感がある。以上の疑問について以下で検討する。

#### 3.1 トモ書きの語について

使い分けが指示される「身上」を除き、残りのトモ書きの13例について、一字下げの音訓が漢字表(音訓表)に載った時期を示すと、以下のようになる。

表3 一字下げの音訓とトモ書きについての内訳

	1948 年	1973 年	「常用漢字表」(2010) の備考の文言
遺言	イ・ユイ		「遺言」は、「イゴン」とも。
七日	ななつ	なな・なの	「七日」は、「なぬか」とも。
老若	ジャク	ニャク	「老若」は、「ロウジャク」とも。
寂然	ジャク	セキ	「寂然」は、「ジャクネン」とも。
法主	シュ・ス		「法主 (ホッス)」は、「ホウシュ」「ホッシュ」とも。
法主	ホウ	ハッ・ホッ	
情緒	ショ	チョ	「情緒」は、「ジョウショ」とも。
人数	スウ	ス	「人数」は、「ニンズウ」とも。
寄贈	ゾウ	ソウ	「寄贈」は、「キゾウ」とも。
愛着	チャク	ジャク	「愛着」「執着」は、「アイチャク」「シュウチャク」とも。
執着	チャク	ジャク	同上
富貴	フ	フウ	「富貴」は、「フッキ」とも。
面目	モク	ボク	「面目」は、「メンモク」とも。
問屋	とう	とん・とい	「問屋」は、「といや」とも。

※音訓が問題となる漢字は下線で示す。

いずれも「当用漢字音訓表」(以下 3.1, 3.2 の議論では「当用」)ないし「当用漢字音訓表(改定)」(以下「改定」)で載った音訓である。「遺言」のみは「イ」も「ユイ」も 1948 年から音訓表に載り、トモ書きは法律関係で用いる「いごん」という語形を表示するためのものであるため、一般的には「ゆいごん」で安定していると見ることもできる<sup>2)</sup>。それ以外は 1948 年時点の音訓によって漢字で書けるかどうかの問題となる点で「遺言」とは異なる。

残りの語は熟語中の発音変化の有無(音訓表の音訓と異なるかどうか)とトモ書き内容の実態(表 2 の結果がおおむねそれに当たるとする)との一致・不一致という観点から以下の四つに分けられる。

- (5) 発音変化あり、実態と一致：七日
- (6) 発音変化なし、実態と一致：老若、情緒、問屋、富貴
- (7) 発音変化あり、実態と一致しない：人数
- (8) 発音変化なし、実態と一致しない、または判定しにくい：寂然、法主、寄贈、愛着、執着、面目

「七日」は「当用」に載る音訓は「ななつ」のみであったが、当時の辞書類における扱いにゆれはなく、「七日」と書くことが認められていた。武部

(1979, p.74)によると、「七日」の「なの・なぬ」は「雨→雨戸」などと同様の語中の発音変化であり漢字表記してよいと考えられたという<sup>3)</sup>。NHKでは2001年に「○ナヌカ ○ナノカ」から「1.ナノカ 2.ナヌカ」へと扱いを変更した(NHK放送研究部(2001, p.96))。

(6)の「情緒」は「当用」に示された漢音「ショ」でなく慣用音「チョ」を用いた語形を使いたいという理由から「改定」に「チョ」が入る。その後「じょうちょ」の語形が優勢という状況が続き現在に至る。国語辞典では「チョ」は表外音訓としていたが、『NHK用字用語辞典』(1965, 以下『NHK1965』)のように漢字表記を認める立場もあった。一方、「問屋」の場合、「当用」に示された「とう」からは直接に「とんや」が出てこない。「とい」は「とう」の連用形であると考えれば「問屋(といや)」は漢字表記できる。しかし「とんや」は「雨戸」などと同様に扱いにくいと考え、『岩波国語辞典 初版』(1963, 以下『岩国 初版』)や『新選国語辞典 初版』(1959, 以下『新選 初版』)などでは表外訓扱いするのに対し、『NHK1965』や『明解国語表記辞典』(以下『明解』)は「とんや」の漢字表記を認めるというように扱いが分かれた。この問題は「改定」に「とん・とい」を入れることで解消される。

「富貴」は「当用」には「フ」があるのみであるが、『NHK1965』など「ふうき」を掲げ、それを漢字表記とする辞書もある。「詩歌(しいか)」が「詩」の長呼とされるのと同様に扱い、「富貴(ふうき)」としたものであろうか。『岩国 初版』は「ふうき・ふっき」ともに見出しとするものの、「ふっき」は空見出しとし、「ふうき」に導く。いずれも漢字表記が可とされる。広田(1959, pp.51-58)に「富貴(ふうき・ふっき)」は「漢字書きの認められるもの」として記される。ただしその理由は示されない。広田栄太郎(1909～1974)は国語審議会幹事を務めた人物である。

「詩」は「当用」時代から「シ」のみが音訓表に載り、「シイ」は「詩歌」の場合に用いる発音として言及される。「富」がそれと異なるのは、「当用」の「フ」に対し、「改定」に単独の「フウ」が加わったことである。「フウ」があれば「ふっき」の「フッ」は「フウ」の促音化として処理できるとされた可能性がある。「当用」時代にも『岩国 初版』など「ふっき」を表内音



訓扱いしていた辞書があることを考えると、その際は「フ」の促音化として処理されていたようにも見える。「フ」のみだと表内音として処理することに異論があったものの、「フウ」を入れておけば、それも収まると判断されたのかもしれない。資料が見つからないので確定はできないが、「富貴」の音の扱いは、ほかのトモ書きの語と比べて複雑なところがある。「納」の場合は「当用」の「トウ・ノウ・ナ」に加えて「改定」で「ナッ」が入った。「納得」「納豆」など標準的に促音で発音する語があるのに対し、「富貴」は促音があくまで選択肢の一つ（「ふうき」「ふっき」）にすぎないという理由が両者の扱いに差が出た要因として考えられる。

(7) の「人数」は「にんず」を主として「にんずう」をトモ書きで示す現在の示し方が実態に合わなくなっている。NHKでは1990年に「①ニンズー ②ニنز」とした（NHK放送研究部（1990, p.59））。

(8) には「当用」に示された音訓で発音するのが一般的である「寄贈」「愛着」「執着」といずれの語形が優勢であるとも判断しにくい「寂然」「法主」「面目」とがある<sup>4)</sup>。「愛着」「執着」の濁音形は「当用」時代の辞書においても連濁と解釈され、漢字表記が可とされた（武部（1979, p.73））。一方「寄贈（きそう）」は音訓表にない清音の語形を漢字表記してよいかどうかの問題である。このような場合は「漢字で書いてもよい。「当用漢字音訓表」の使用上の注意事項参照」とする『NHK1965』（上記の引用は「ことばの表記について（基本方針と原則）」のp.9から）のような立場と「きそう」のみを「寄贈」の語形として示す『岩国 初版』のような立場とに分かれた。このように、音訓表で示された音訓の扱いを国語辞典や新聞・放送などは各業界、各社で個別に判断せざるをえない事例が数多く生じたのが「当用」の問題であり、それに対する批判を受け「改定」では、個々の音訓を細かく漢字ごとに振り分ける処理がとられることになる。このことは3.2に記す。

一方(8)のうち、「寂然」「法主」「面目」は日常語とはいいたくとも要因となり、語形が安定しにくい<sup>5)</sup>。「法主」についてNHKでは2016年に「法主」は「○ホーシュ ○ホッシュ ○ホッス」（これまで ①ホッシュ ①ホッス ②ホーシュ）とし、優先順位をつけることをやめた（山下（2016, p.78））<sup>6)</sup>。これは「法主」が仏教の専門語であるため（宗派に

より呼び方が異なる), マスメディアも含め専門外の人間には, どれが標準的な語形であるとも判断しにくいことをうかがわせる決定であるとの見方もできる。

上記のような種々の性格を持つものがトモ書きという書き方のもとに一括されているところに漢字表の複雑さの一端がある。

### 3.2 「特別なもの又は用法のごく狭いもの」の内訳

一字下げの音訓は計 173 あり, 158 漢字が一字下げの音訓を一つ以上持つ(「納」の四つが最大)。これらの漢字に対して, それぞれの音訓がいつから明記されているのかを見ると次のようになる。

表 4 音訓表・漢字表ごとの音訓の内訳

年	音訓数	語例
1948	57	断食 暴露
1973	102	勤行 掃陰
1981	5	極木 披露
2010	9	小唄 眉間

1948 年の「当用」から 1973 年の「改定」にかけて大きな動きがあったことが明らかである。その理由は「当用」における音訓の扱いに問題があったことによる。「当用」には「まえがき」のあとに「使用上の注意二」として「つぎのような熟字は, 使ってさしつかえない」とあり, 以下の語例が載る。

(9) 木き→木立こだち 目め→目深まぶか 金かね→金物かなもの 雨あめ→雨戸あまど・春雨はるさめ 何なに→何時なんどき 十ジュウ→十銭ジッセン 合ゴウ→合併ガッペイ 皇オウ→天皇テンノウ寸スン→三寸サンズン 発ハツ→出発シュッパツ 夫フ→夫婦フウフ

前述した「愛着」のように「ジャク」を「チャク」の連濁と見れば, 辞書などでは濁音の語形が表内音として処理される一方, 「間屋」のように処理に違いが出る場合もある。これについて以下の指摘がある。

(10) このような示し方があまり適切な方法ではなかったために, 音訓表適用の上で幾多の疑問を引き起こすようになった。改定音訓表にお

いて該当する音訓をすべて掲げる形に改められたのは、このような疑問を解消するためである。(武部(1979, p.68))

以上を受けて筆者が確認したいことは、具体的に、どのような語に処理上の問題が生じたのかという点である。トモ書きの語については、上述したとおりであるため、それ以外の語に関して以下で整理を試みる。

「回向」「留守」「繁盛」など「当用」に音訓が明記された語は、どの辞書でも問題なく表内音訓として処理され、漢字表記が標準表記となった。しかし「祝儀」「祝言」の場合、「当用」に載る「シュク」に対し「シュウ」が「使用上の注意二」で処理できるかどうかにおいて判断が分かれ、広田(1959)や『NHK1965』は漢字表記できるとするのに対し、『岩国 初版』『明解』は表外音訓扱いとして処理している(『新選 初版』は「祝儀」「祝言」のうち、前者は漢字表記でき後者はできないとの処理になっていた)。そのような結果として「改定」に「シュウ」が明示されることとなる。おおむね以下に当てはまる場合に、辞書などの扱いにゆれが生じ、「改定」でその解消が図られた。

(11)音(おと)の長短、清濁、長音化、促音化、母音変化に関わる部分を「使用上の注意二」の適用例とするかいなか。

音訓表の「ユウ」「ツウ」「キャク」に対する「遊山(ゆさん)」「通夜(つや)」「行脚(あんぎゃ)」、「ガイ」に対する「街道(かいどう)」、「カク」に対する「格子(こうし)」、「ソウ」に対する「早急(さっきゅう)」「早速(さっそく)」、「て」に対する「手綱(たづな)」などが辞書上の扱いに統一が見られない事例であった<sup>7)</sup>。これは「遊」に「ユ」が、「早」に「サッ」が「改定」で明記されることにより解消された。「当用」では「漢字書きの認められないもの」であっても(広田(1959, p.51), 新聞では漢字で書くという処理が行われたものに「合戦(かっせん)」「格子(こうし)」「行脚(あんぎゃ)」「街道(かいどう)」「財布(さいふ)」「遊山(ゆさん)」「掃除(そうじ)」がある(広田(1959, p.58))。「掃除」は学術用語集も「掃除」と同書にある)。漢和辞典などでは「街」の「ガイ」は漢音, 「カイ」は慣用音, 「除」の「ジョ」は呉音, 「ジ」は慣用音と記される。それゆえ「街道」「掃除」が漢字で書けると判断することには無理があるように現在の人間には映る。しかし「当用」の「使用上の注意二」

には具体的な説明はなく、その語例から応用可能かどうかを判断するのは、公的な音訓表によって、表内音訓と表外音訓とに区別するというところに、まだ不慣れであった当時の人にとっては困難なことであったと想像される。

たとえば「寸」の漢字音には「ズン」はないから「三寸」は連濁の例、「街道」の「カイ・ガイ」は漢字音の違いというように区別される。「給仕」は、「当用」時代は連濁の例として解釈され、いずれの辞書も漢字表記できるという扱いになっていたが、その後「シ」は漢音、「ジ」は呉音というふうに捉え直され、「改定」で「ジ」の音が明記された。

国語辞典は漢字で書けるとする音訓の範囲が狭いのに対し、新聞・放送では広めに解釈している場合が多い。そのような不一致が問題となり、「改定」においては、音訓欄に示す音訓の数が大幅に増えた。問題になる事例は、音訓欄に明記することによって解決が図られたことにより（その分、1字複数音訓の漢字が増えた）、それ以後の「常用漢字表」「常用漢字表（改定）」では、同様の問題が生じることは抑えられた。

各種の慣用的な発音を「当用漢字音訓表（改定）」で大幅に音訓欄に組み込んで処理するようになったことにより、一字下げで示される音訓の種類が雑多なものとなった、というのが、(4)の2に掲げた疑問の答えである。

### 3.3 神仏に関する語が多いことについて

表1に太字で示したように一字下げの音訓には、神仏、特に仏教関連の語が多い。「修行」「弟子」のように仏教を離れた一般的な意味・用法を持つ語であれば読める人が多い一方で、「香華」「六根清浄」のように専門性の高い語になると読めない人が多くなる。仏教語に用いる漢字・音訓が採用されたのはいつか。

トモ書きのところで扱った「法主（ほうしゅ）」は「当用漢字音訓表」時代から表内音訓扱いであるが、「当用漢字音訓表（改定）」では「ホツ」の音が加わり、「ほつす」「ほつしゅ」の語形が表内音訓で書けるようになる。これを除き、表1に示した47語について、音訓表・漢字表との関係を確認すると次のようになる。

表 5 神仏関連の語が音訓表・漢字表に載った時期

年	語数	語例
1948	21	功德 行脚
1973	23	香華 通夜
1981	2	和尚 衣鉢
2010	1	未曾有

1948 年および 1973 年にほぼ語が出そろっている。たとえば「行脚」は「アン」が「当用漢字音訓表」に入っていたものの「キャ」がなかったため、「行ぎゃ・あんぎゃ」と書くのか、『NHK1965』のように漢字表記できるものとして扱うかするといった問題が生じた。1973 年の「当用漢字音訓表(改定)」に「キャ」を明示し、連濁扱いとすることによって、この問題の解消が図られた。語としては「当用漢字表」時代において神仏関連の語が必要な語として捉えられていたことがうかがえる。2010 年の「常用漢字表(改定)」に加わった「曾」の「ソウ」を用いる「未曾有」は仏教語の「十二分経の一」を意識して追加されたわけではなく、「今までにないこと」という一般語の意味で採用されたにすぎない。したがって「当用漢字表」の時代において、神仏関連の語が一般の言語生活に必要なと判断され、そのうちの少なくない数の語について、漢字表記することが望ましいと考えられたことが以上のことから明らかである。仮に、2020 年代に一から現代語に必要な語彙を記すための漢字を選定するということになった場合、果たして、これだけ多くの音訓が神仏関連の語を書くために選ばれるであろうか。たとえば「香華・散華」の「ゲ」は、専門語に使う音訓ということで、表外音訓として扱われても不思議ではない<sup>8)</sup>。なぜなら以前と比べ、一般の人々と寺や神社との関係が希薄になっているからである。しかし今後のことはともかく、このようなことを問題にするのであれば、「当用漢字表」時代は今よりも人々の信仰心が高く、寺や神社でその方面の語彙を覚える機会があったこと、そのような前提をもとにして音訓表に載せる音訓が選ばれたという証拠を示す必要がある。後半の部分つまり音訓選定の過程については、有力な資料が見つかっていない。前半部分については、石井(2007)の示す数字が参考になる。石井(2007, p.3)は「複数の調査機関の世論調査の結果をひとつにまとめ」て「戦後高かった

日本人の「信仰あり」の割合はしだいに減少し、現在は三割を切るまでになっている」と述べる。また、石井（2007, p.25）では、以下のようにも記す。

- (12)一九四〇年代後半に六割ほどだった「信仰あり」の割合は、その後減少していく。一九六五年に読売新聞社が行った調査では、五六パーセント、同じく一九六九年の調査では三五・八パーセントにまで減少した。

信仰の内訳において仏教の割合が高いことについて、石井（2007, pp.25-26）は日本人が「葬儀や法事、あるいは自宅の仏壇に手を合わせることを通して、死や死後の世界、生まれ変わりについて考える機会を得た」とし、さらに僧との交流によって「正統な仏教信仰かどうかは別としても、仏教的世界に対する親近感を感じたのではないか」と解釈する。寺との関係があるということは「寺院の伽藍・庫裏の維持管理、檀信徒が参加する檀務や法務」（桜井・川又（2016, p.5））などによって仏教語を見聞きする機会があることを意味する。

以上をもとにして言えることは、「当用漢字表」時代の日本では、「常用漢字表」時代と比べて、相対的に信仰心のある日本人が多かったということであり、それゆえ「当用漢字音訓表」「当用漢字音訓表（改定）」においては、神仏特に仏教関連の語に用いる漢字と音訓を入れることについて、その音訓が特別だという意識はあっても、要るか要らないかという観点のもとでは、必要だとする合意が得られやすかった（仏教界などからの働きかけがあったのかどうかについては未詳）。あるいは1漢字1音訓を理想とする人からの反対意見があったかもしれないが、その声は現実には反映されず、漢字表に神仏語彙に用いる音訓が多く採用され今に至る。本稿と同様の調査が「当用漢字音訓表」時代に行われたのかどうかは確認できていないので、大学生の実態を比較することはできない。当時の学生にとっても難しい音訓は存在したはずであるが、仏教関連の音訓は、仏事への参加などを通して大人になってから身につく機会があった。その機会自体が（全体的傾向として）減少しているのが現在であり、それゆえ、当時と同じような段階を踏んで音訓を身につける可能性も低い<sup>9)</sup>。

## 4. おわりに

本稿では「常用漢字表」に一字下げで載る音訓について議論し、どこに誤読が生じるのか、トモ書きの語はどのように読まれるのかということを現在の問題として考察した。その次に、「当用漢字音訓表」以降の音訓表・漢字表に関して、トモ書き、一字下げの音訓の性質、神仏に関連する語彙が多いことについて検討し、現在の漢字表に掲げられる一字下げの音訓の歴史的な背景を明らかにした。「常用漢字表」を一般社会で有用なものとして機能させるためには、単に漢字・音訓を追加して新しいものにするだけではなく、たとえば NHK などの語形調査をもとにして、トモ書きの音訓については、主ではなく従のものを「～とも」として統一的に掲げるように調整するといった作業が要る。また仏教関連の語に用いる漢字の音訓は「常用漢字表」に残すかどうか、残すとしても義務教育の範囲で覚える必要があるかどうか、特別な分野の音訓として扱いを変えるかどうかといったことについても議論が必要である。

### 註

- 1) 送りがなのない表記から漢語ではなく和語を導き出すという判断は「供物（くもつ）」にも見られる。「くもつ」46 人に対し、17 人が「そなえもの」と回答した。『NHK 漢字』や『教科書』の「そなえもの」の表記は「供え物」である。この場合は、「くもつ」という耳慣れない語ではなく、特に「お～」の形で見聞きすることのある「そなえもの」を「供物」に対して当てはめたということである。
- 2) 1964 年当時の NHK では「いごん」は誤りとして処理した（番組研究部用語研究班（1964, p.64））。
- 3) 黒田（2016, p.140）は「七日」を「なのか」と読むのは nanaka だと「周りに a の音ばかりが続くので、かえって発音しづらく、それをなんとかしようと一つだけ o に替えたのである」と説明する。これは異化という現象であり、柴田（1981, pp.75-76）にも同様の説明がある。
- 4) 「愛着」について塩田（2011b, p.98）に「1. アイチャク 2 アイジャ



ク」から「アイチャク」のみに変えるNHKの決定が載る。「寄贈」は浅井（1995, p.54）に全国調査の結果として「寄贈」の「きそう」が31.6%,「きぞう」が63.1%,「情緒」の「じょうしょ」が15.3%,「じょうちょ」が80.8%という数字が載る。山下（2013, p.76）にはNHKのアクセント辞典の扱いを「①キゾー ②キソー（これまで ○キソー ○キゾー）」とすることが記される。

- 5) 塩田（2011a, p.37）には、全国調査の結果として、「面目が立たない」の「面目」は「メンボク」と「メンモク」のどちらかが多数派を占めるという結果にはならず、年代差も特に見られない」と記されている。
- 6) NHK放送文化研究所の山下洋子氏によると、取材をする記者から宗派ごとに語形が異なるので、優先順位をつけて扱うのは難しいという指摘があったという（直話による）。
- 7) 『新選 初版』で「手綱」「手繰る」は表外音訓扱いであった。「酒屋」「船宿」などは漢字で書けるとされることから考えると、『新選 初版』で「手綱」「手繰る」に▲（表外音訓の印）がついているのが誤植などのイーजीミスと捉えてよければ、原則として語中の母音変化については、どの辞書も表内音訓の範囲で処理していると見ることができる。なお、「彼女」の「かの」が『岩国 初版』で表外音訓扱いなのは、「当用」では「彼の」「かの」が限られた語にのみ使うものとして、傍線つきで示されたものの具体的な語例がないため、その判断に困り連体詞の「かの」も「彼女の」「かの」も表外音訓とした可能性がある。『NHK1965』では連体詞「かの」の「彼」は表外音訓、「彼女」の場合は漢字となっている。「改定」では「かの」が一字下げ、「彼女」がその語例として示されることになり、「かの」は「それ以外の用例（この場合は「かの地」「かの男」など）に用いないという趣旨」が提示され（武部（1979, p.82））、上記の問題が解消された。
- 8) 「散華」は「戦争を美化して言う語」（『岩波国語辞典 第8版』）でもある。清水（2010, p.163）は「日本人の「エートス」を桜花に譬え、特に軍人の戦争に臨むに当たっての「モラル」にまで昇華させた話は、その後、日本の初等中等教育現場にまで浸透していく。第二次大戦の戦前



戦中にこの課程の教育を受けた世代なら、これに「散華（さんげ）」の思想を加えた教育をいやというほど受けたはずである」と述べる。世代によっては、仏教を離れた意味でも「散華」は身近なことばであった。

- 9) 石井（2007, p.72）は高度経済成長期の人口移動により都市の過密化と地方の過疎化が生じたことにふれたうえで「過疎化による世帯数の減少は、寺院の存続に直接ダメージを与えることになった。他方で人口過密の都市においても、土地の高騰にともなって檀家の分散化が進み、寺院と檀家が密接な関係を保つことのできる距離を越えてしまったといわれる。その結果、檀信徒が寺院を訪れる機会は、お彼岸、お盆など限られた時期となり、檀信徒の寺院への帰属意識はしだいに希薄化していったと考えられる」と述べる。なお、自然信仰など伝統的な考え方が再び人の心をつかむようになってきたとの動きもあるという。このことについては、たとえば内山（2021）を参照。

## 参考文献

- 浅井真慧（1995）「「情緒」は安定、「農作物」はゆれている」『放送研究と調査』45-3, pp.54-61
- 石井研士（2007）『データブック現代日本人の宗教 増補改訂版』新曜社
- 内山節（2021）『新しい共同体の思想とは』農山漁村文化協会
- NHK 放送研究部（1990）「放送のことば」『放送研究と調査』40-4, pp.56-59
- NHK 放送研究部（2001）「用語の決定」『放送研究と調査』51-4, pp.96-105
- 京極興一（1973）「「当用漢字音訓表」について」『信州大学教育学部紀要』29, pp.71-84
- 黒田龍之助（2016）『外国語を学ぶための言語学の考え方』中央公論新社
- 桜井義秀・川又俊則（2016）「はじめに」『人口減少社会と寺院』法蔵館, pp.3-12
- 塩田雄大（2011a）「「美男子」が多いのはどの地域？」『放送研究と調査』61-10, pp.28-47

- 塩田雄大（2011b）「用語の決定」『放送研究と調査』61-10, pp.98-105
- 柴田武（1981）『言語学概論 1234』日本大学通信教育部
- 清水多吉（2010）『西周』ミネルヴァ書房
- 武部良明（1979）『日本語の表記』角川書店
- 番組研究部用語研究班（1964）「放送用語メモ（18）」『NHK 文研月報』14-11, pp.60-64
- 広田栄太郎（1959）『用字の技術』東京堂
- 山下洋子（2013）「ことばの読みについて」『放送研究と調査』63-10, pp.74-87
- 山下洋子（2016）「用語の決定」『放送研究と調査』66-9, pp.76-87